

ミュリエル・スパーク『死を忘れるな』における 1950年代と高齢者問題

畑中 杏美

Ageing England in the 1950s : A Study of Muriel Spark's *Memento Mori*

HATANAKA Azumi

Abstract

Muriel Spark's *Memento Mori* (1959) is a novel that mirrors the ageing society in England in the 1950s. This novel is often regarded as Spark's 'Catholic novel' but you can see her interest in describing English society and its problems. Although the emphasis on youth was the mood of the period, Spark chose to write a novel that featured the elderly people and their lives. From the 1940s to the 1950s, many people were afraid that the elderly population was overcrowding the hospitals, especially in London, and the lack of young people made the situation worse. Because of the two wars during the first half of the twentieth century, older people felt the pressure of having to live without any comfortable communities to settle in. It was such a crucial problem that the magazine *Punch* felt compelled to publish a series of essays that described the lives of the elderly and the social care available for them. By analyzing *Memento Mori*, this paper aims to show that Spark was also aware of the increasing number of elderly people in the society and how she considered the 1950s a difficult time for the elderly population.

キーワード：ミュリエル・スパーク、『死を忘れるな』、高齢者、1950年代
key words: Muriel Spark, *Memento Mori*, elderly people, the 1950s

0. はじめに

ミュリエル・スパーク (Muriel Spark, 1918-2006) の第3作目の小説『死を忘れるな』(*Memento Mori*¹⁾, 1959) は1950年代のイギリス小説の名作である一方、スパークの「カトリック小説」の一つとされることが多い。だが、ある種1950年代らしからぬ特異な小説でもある『死を忘れるな』を単なる「カトリック小説」とすることについては、これまでも疑問が呈されてきた。²⁾ 1954年のカトリック改宗という経験を経て、1957年に小説家としてデビューしたスパークの作品は、しばしばカトリック的な教訓や、改宗者としての宗教観を反映させたものとして読まれることが多く、グレアム・グリーンやイーヴリン・ウォーなど、1950年代に活躍した「カトリック作家」の

小説とカテゴライズされることが多い。たしかにスパークは超自然的な力による干渉を受けて苦悩する作中人物を頻繁に描き、その中心に置かれるのはしばしばカトリック改宗者である。たとえば、『慰め手』(*The Comforters*, 1957) において、カトリック改宗者キャロライン・ローズには、そこにはないはずのタイプライターの音や、自分の行動や思考を語る「声」が聞こえる。キャロラインは消えない幻聴に苦しみ、精神衰弱に陥るものの、その経験を通して、自分が虚構の世界の作中人物であるということに気が付く。また、『死を忘れるな』においては、「死ぬ運命にあることを忘れるな」(“Remember you must die”) とだけ告げて切れてしまう発信源不明の怪電話が70歳以上の高齢者に無作為にかかってくるが、そのメッセージを落

ち着いて受け止めることのできた数少ない高齢者の一人であるチャーミアン・パイパーは小説家でありカトリック改宗者でもある。このようにして繰り返し描かれる、カトリック改宗者と超自然的な現象については、見えない力によってコントロールされている(かもしれない)自己を認識し、そのような力の存在と介入を受け入れることができるか、という試練を作者がキャラクターに課しているものとして捉えることができるだろう。³⁾

しかしながら、このようなオーソドックスかつ、ある種安全な読解にのみ頼ってしまうと、スパークの小説におけるより興味深い部分、同時代の作家とは異なるスパークの不可解な部分でもあり、もっとも独創的な部分を見落としてしまいがちになることも確かである。⁴⁾ 先に述べたように、カトリック改宗がスパークの人生における重要な転機であり、彼女の創作にも影響を及ぼしていることは確かであるが、スパークは個人的にも社会的にも様々な経験を積み、それらの経験を作品に反映させているため、彼女の作品が信仰の表現のみに終わっているということは考えづらい。19歳で結婚し、翌年にはアフリカへ移住、渡航先での出産や、精神を患った夫との生活、さらには戦中のイギリスへの帰国など、スパークは20代にしてすでに、数多くの困難に直面していた。帰国後は息子を育てながら、外務省情報部で対ドイツ情報操作の任務につき、戦後は編集者としても社会経験を積んだ。作品全体を見渡せばたしかに信仰というテーマを捨て置くことはできないが、個々の作品においては、改宗以前に積んできた経験に着想を得たものも多いうえ、改宗以後のイギリスの社会を作品中に描きこんでいるのである。

さらに、1957年のデビュー以後、小説22作品、短編40作品以上に加え、自伝や批評、脚本など、半世紀近くにわたり執筆をし続けたスパークの作品の歴史は、それ自体が戦後文学の歴史であるとともに、戦後のイギリス社会思想と切り離して考えることのできないものでもある。⁵⁾ にもかかわらず、戦後イギリス社会とスパーク作品を関連付ける試みは、これまで十分に行われてきたとは言えない。『死を忘れるな』についても、冷戦期の

小説として、イギリス社会と関連付けて読む試みがなされてきてはいるが、まだ論考の数は少ない。本論文においては、スパークの小説『死を忘れるな』を、1950年代イギリスの高齢者問題を描いた小説とし、スパークの作品に描かれている高齢者を、当時のイギリスの社会背景を確認しながら読み直したい。

1. 背景：1940－1950年代イギリスの高齢者問題

20世紀に二度の大戦を経験したイギリスは人口減少、特に若年層と高齢者層の人口のアンバランスに悩まされていた。⁶⁾ 1950年代はとくに、いわゆる人口の高齢化現象が社会問題として浮上した時代であったのだが、1940年代には、高齢者に限らず、様々な社会階層におけるあらゆる年齢の人々に関するケアの欠乏や不足が改善すべきものとして注目されはじめていた。第二次世界大戦中の1941年、イギリス政府は「社会保障及び関連サービスに関する委員会」を発足させ、1942年には委員長 William Beveridge の署名で『社会保障及び関連サービス』(*Social Insurance and Allied Service*)が公表された。このいわゆるベヴァリッジ報告には、ナチスドイツに勝利したのちのイギリスが目指すべき社会の姿をあらかじめ国民に示すことで戦意を高揚させるという意義が含まれていたが、この調査は第一次世界大戦後の大量失業時代という悪夢を繰り返すわけにはいかないイギリス政府の切実な要請でもあった。英雄として帰還したはずの復員兵が失業者として救済法の扶助を受けるために列をなす姿は、戦間期が短かっただけに、イギリス国民にとってはまだ新しい記憶であったのだ。⁷⁾ ゆえにベヴァリッジ報告は、決して高齢者だけに的を絞った提言ではなかったものの、高齢者問題を「社会保障問題のなかでも最も重要かつ困難な問題」⁸⁾ として扱い、年金にまつわる問題を含む社会保障についての構想を含んだものとして、戦後イギリスの社会福祉政策を方向付けるものとなったのである。⁹⁾

しかし、戦時中から調査が行われ、政策が構想されたとしても、それが効力を示すには長い歳

月が必要であったし、戦中に行われた調査によって戦後の社会状況について完全な予測を立てることは不可能であった。たとえば、ベヴァリッジは 1901 年からの総人口の推移とともに、15 歳未満、15 歳から年金受給年齢、そして年金受給年齢に達した者の割合、さらには調査時の傾向がそのまま続いた場合に予想される 1970 年の予測値を表にし、いわゆる少子高齢化の危機を予測したが、¹⁰⁾ 戦時中のイギリスでは、即座に改革を行うことはできなかった。ベヴァリッジは年金制度の見直しについては、受給できる金額の引き上げを提案してはいる。しかし、その構想は、戦後 20 年は引き上げまでの移行期間とする漸進的なものであったうえ、高齢者ケアの担い手としても、既婚女性が介護者となることへの期待が大きく、実際の戦後の社会では機能しづらくなっていたのである。¹¹⁾

戦後期は、福祉国家を目指したイギリスの理想と現実のギャップがまだ大きく、市民たちにとってはこれからの未来が良くなるか悪くなるのかわからない、過渡期にあったと言える。医療技術の発展という恩恵を受け、長寿を全うする者が増えれば増えるほど、高齢者には社会の重荷というイメージもつきまとうようになっていた。

戦後 5 年の節目の年でもあった 1950 年、イギリスの風刺漫画雑誌『パンチ』には、2 号にわたる連載で、“Care of the Old” というエッセイが掲載され、彼らが「2 つの大戦の抑圧を感じ立ち上がらざるを得なかった」事情について述べている。また同記事は、1940 年に英国老人福祉委員会 (National Old People's Welfare Committee) が発足したことについて触れてから、次のようにも指摘した。

But if we take only London, and consider the thousands of shabby little streets which make up the bulk of it, these must contain great numbers of old people living precariously on pensions and mainly looking after themselves. Whether they are bedridden or can get about, many of them are lonely. Radio has helped tremendously, but what they want most is a little human interest from

outside. And this is where the visitor comes in. For a long time visiting has been a special concern of the churches, but now it is being taken up on a national pattern.¹²⁾

都市部に住む高齢者たちの多くは、ベヴァリッジが期待した家庭内の介護者による支え無しに、孤独に暮らしていた。十分とはいえない年金にたよる生活は心もとなく、都会の入り組んだ路地も復興ままならず裏ぶれた雰囲気のままだ。すべての国民が生活を立て直さなくてはならない戦後期に、親族のなかに老齢に達する人がいることは家庭内の重荷であっただろうし、配偶者や子供と死別した場合、高齢者たちは寄る辺もない暮らしを余儀なくされたのである。しかも、イングランド国教会の教区内で、暮らしに余裕のある者が助けを必要とする人々を訪問するという伝統的かつ有機的な人々のつながりも、20 世紀の戦後社会では機能しづらくなっていた。物資が乏しいなかで、高齢者に暖かい食事を届けるボランティアによるサービスや、赤十字の慈善活動も行われていたものの、高齢者の生活支援において国家の積極的な介入が要請されていた時代であったことがわかる。

『パンチ』の記事の連載は、第一回と第二回でそれぞれ、自宅で暮らす高齢者と、高齢者養護施設に入居した者たちについて述べているが、どちらの記事も高齢者たちの多くは身寄りがなく、孤独であったということを問題として強調している。たとえば、第 1 回目の記事では、高齢者専用のクラブについて詳細な描写がなされている。費用は年間 4 シリング、そこに集う老人たちは約 800 人。食事やお茶は別料金だが、ピアノを弾く者、それに合わせて踊る者、ガーデニングを楽しむ者までいる。その場所は活気にあふれ、孤立や退屈という言葉とは無縁のようである。ここでは 70 歳の男性も「若者」と言われ、誕生日を祝ってもらえることもできる。

A youngster of seventy was giving a birthday party in the conservatory. As he cut the cake he

observed that all he asked for were a few more years, in which to go on enjoying a place that had swept all the loneliness from his life.¹³⁾

この老人専用クラブはまさに、高齢者たちにとって天国のような場所であるかに思われる。「70歳の若者」はあと数年間だけ、ここで孤独を忘れて過ごすことが望みであると言うが、そのあとのことは語らない。この記事はとても前向きに、この老人専用クラブの素晴らしさを語ってから、一人暮らしの老人がふと語った孤独に焦点を絞ることで、彼らのこれからの対する不安を表してもいいのである。この記事からは、1950年代に高齢者であった人びとのなかでも、自宅で暮らしている人々が、比較的自立した生活をできていたことが読み取れる一方、彼らの残りの生涯の安寧が必ずしも約束されているわけではなかったということもわかる。クラブに集まる老人たちは自宅に帰れば孤独な生活を送る人々であったのであろうし、70歳にして「若者」と呼ばれる環境にあるということは70歳以下の人々との接触がほとんど無いことを示しているのだろう。戦後社会のイギリスを生きる老人たちにとって、毎日の暮らしは孤独との闘いを生き延びることでもあったのである。

そして、自宅で暮らす老人たちよりも厳しい状況に置かれていたのは、公営の老人病棟に暮らしていた者たちである。前述のエッセイ記事“Care of the Old”において、第1回の記事は自宅で暮らす老人について述べていたが、第2回の記事は公営の老人病棟に的を絞って話を進めていく。

Two weeks ago we described some of the things being done for old people still able to remain in their own homes. The question of how to deal with those no longer fit is complicated. What aggravates it most is the fact that the number of old people in this country is increasing, and disproportionately to the young.¹⁴⁾

「自宅に留まることができる高齢者」よりも問

題なのは「もはや自宅での暮らしに適應できない者たち」であった。高齢化社会を迎えようとしていた1950年代のイギリスにおいて、高齢者と若年層の人口の不均衡、そして病棟のベッドが老人たちで埋まっていくという社会現象は無視できるものではなかったのだ。そこで、問題解決の糸口として注目が集まったのがいわゆる「老人病学」(geriatrics)である。起源には諸説あるが、このころ高齢者が入居していた施設では、理学療法などのケアによるリハビリテーションなど自立を奨励しており、医学的な研究の興味としても高齢者たちは注目されていた。記事では、92歳の老女が歩行訓練を行って自宅に戻れるかもしれないという見込みや、17年間寝たきりであった男性患者のリハビリ成功例なども紹介されている。寝たきりからの復帰、そして埋まりっぱなしのベッドに空きを作るため、高齢者でも未来あるひとりの人間として扱う自立支援は、たしかに高齢者ケアに必要な不可欠なものであった。また、この記事が繰り返し述べるように、高齢者に対する医学が進歩していたことも悪いこととは言えないだろう。だがこの記事は、そのような進歩を手放しで称賛するものではない。そうではなくて、医療科学分野におけるさまざまな進歩や、社会改良が進められていく中で、それでもまだ課題が残されていることを指摘するものであったのだ。たとえば、寝たきりから歩けるようになった老人たちはどこへ行くのか、という問題である。

Several beds were empty because their occupants had gone home on short leave. The specialist believed strongly in this, partly to persuade patients they were still normal human beings with a future, and partly to accustom families to the notion of having them back. The latter is something of a new social angle, for before geriatrics came in the family generally assumed, sometimes with relief, that their problem was permanently solved once the hospital took over.

Many old people, however, have no home to go

to, and even if relatives are willing the calamitous degree of overcrowding is against them.¹⁵⁾

老人病学の導入はたしかに、高齢者へのアプローチの在り方を再考するために重要であったのかもしれないが、病状が改善してから行く場所がないならば、病棟から出るための努力をさせる動機づけは難しい。また、第 1 回の記事で、多くの高齢者が一人で暮らしていたということから考えても、一度自宅を出てしまえば、彼らが「帰宅」する場所がなかったのではないかということもこの記事から読み取ることができる。

雑誌掲載のエッセイであるこの記事から、1950 年代のイギリスで、高齢者たちが社会に居場所を見出すことのしづらい状況に置かれていたことが読み取れる。当時の読者にとっては老後、自宅で暮らすことができるか、高齢者専用の養護施設に入居するかということが重要な違いとして認識されていたが、どちらにせよ、高齢者は、戦後社会における日々の暮らしのなかで、彼らなりの戦いを生きていたのである。また、高齢者人口の増加に伴い、医学的にも高齢者への関心が高まった結果、高齢者は若者中心の社会の片隅に暮らす、見えづらい存在ではなくなってきていた。20 世紀のイギリス社会はもはや高齢者たちから目を背けることができなくなっていたのである。

2. 『死を忘れるな』における高齢者

これまでに述べたように、戦争で多くの若者が命を落とした一方で、医学技術の発展によって高齢者たちの寿命が延びた第二次大戦後のイギリスは、人口のアンバランスが問題となり、老いの問題が顕在化した時代であった。それは政府による公式な見解からも明らかであるし、一般大衆が購読する雑誌でも問題として取り上げる特集記事が組まれていることから、当時の市民たちがいわゆる高齢化社会について深刻な関心を寄せていたと言えるだろう。

しかし、老いという問題が可視化されていたはずの 1950 年代になっても、小説作品の中心にいたのは高齢者たちではなかった。むしろ、1950

年代に小説を発表していた作家たちの多くは、若者たちの物語、少なくとも作者と同世代の人物を中心的登場人物とした物語を執筆したのであった。¹⁶⁾ ジョン・オズボーンやキングズリー・エイミスら、1950 年代に「怒れる若者たち」(Angry Young Men) とカテゴライズされる作家たちがいたことからわかるように、1950 年代は小説と「若さ」のイメージが強く結びついていた時代であったのである。

そもそも、若者を小説の主人公に据えるのは、イギリス小説それ自体の因習でもあったとも言える。周知のとおり、イギリスにおける小説 (novel) は、18 世紀になってようやく誕生した「新しい」ジャンルであったが、『ロビンソン・クルーソー』が航海と無人島生活の 28 年間を中心にした物語であることからわかるように、個人の一生のなかでも最も活動的な時期を描くことから小説は始まったのである。散文の物語を好む読者層が興味を持った個人の経験とはすなわち、主人公の冒険を通して描かれる友情や恋愛、もしくはもっと即物的な、衣食住や金銭にまつわる詳細である。そのような因習は、主人公の精神的・経済的な成長を描くことに主眼が置かれるヴィクトリア朝期の教養小説 (*Bildungsroman*) に引き継がれ、ますます小説は若者のための形式になっていった。イギリス小説がこのような伝統をもつことを考えてみると、遺言状のことばかり気にかけている年金受給者や、リウマチの痛みに耐えながら杖を突いて歩く高齢者ばかりの物語というのは、1950 年代になってもなお、読者を驚かせる選択であったと言えるだろう。

デビューして間もない新人作家のスパークが『死を忘れるな』において、ほとんどの作中人物を高齢者にしたのは、当時の文学作品の主流に逆行する形で、いわば奇を衒う意図があったようにも思われる。しかし、スパークには、作品の時空を 1950 年代のロンドンにすることで、執筆時と同時代のイギリス社会と、目の当たりにしていた社会問題をいち早く作品に取り込み、描こうとする意図があったはずである。

前節で見てきた記事では、自宅で暮らすことのできる高齢者は、比較的裕福で健康な者というイメージがともなう一方で、孤独や孤立を恐れる者として描かれていた。イギリス社会における高齢者のそのようなイメージは、スパークの作品の中にも見て取れる。たとえば、コルストン家の3名は、一見すると裕福で幸福そうな人々である。登場した時点で、ゴドフリーは87歳、チャーミアンは85歳、いちばん若いレティでも79歳の高齢者だ。醸造業で成功したコルストン家の長男ゴドフリーは、小説家の妻チャーミアン・コルストン（筆名チャーミアン・パイパー）とナイツブリッジの自宅に住んでおり、家政婦がチャーミアンの身の回りの世話をしているという、裕福な夫婦である。ゴドフリーの妹であるレティは社会改良に対する活動が認められてデイムの称号を受けた人物で、独身のため、单身自宅で暮らしている老人である。チャーミアンはほぼ外出することがなくなり、家政婦の世話になっているものの、ゴドフリーは車を運転し、妻に新聞を読み聞かせ、自分の見た目の若さを誇らしげに感じている。一見すると彼らは前途に何も問題のない、裕福で幸福な高齢者の世帯の一例であるかにすら思われる。

だが実は、作品冒頭の電話を受けた時点で、すでにレティには「死ぬ運命を忘れるな」という怪電話が8回もかかってきていた。レティへの怪電話は止まず、警察も犯人をつきとめることができない。神経をすり減らしたレティは家政婦を雇うことにするが、ひどい疑心暗鬼に陥り身内すら信用できなくなっていく。また、若い頃には文壇をにぎわせていたチャーミアンは、物事の前関係や人の名前の認識が曖昧であり、新しくやってきた家政婦のミセス・ペティグルーに不当に扱われ、虐待されるのではないかと怯えることになる。69歳と偽っているが、実は美容整形で若い外見を保っている73歳のミセス・ペティグルーはゴドフリーと奇妙な愛人関係（スカートをたくし上げてガーターベルトの留め金を見せると1ポンドもらえる）にあり、ゴドフリーはペティグルーに秘密を握られ、ゆすられることになる。

一見すれば裕福で前途に問題などなさそうな

コルストン家の人々であるが、彼らの生活に見え隠れする問題の原因はやはり、孤独や孤立というところにあるだろう。チャーミアンとゴドフリーにはエリックという息子がいるが、作中一度しか実家に戻らない。その一度は、ペティグルーと手を組んで、自分に有利な遺言状を父親に書かせるための帰宅だった。家族による介護が望めないコルストン夫妻は、自宅に住んでいても、介護者を雇うしかなく、その介護者もまた高齢者であるため、彼らが毎日顔を突き合わせるのは高齢者ばかりである。しかも、コルストン夫妻は、お互いに過去の不貞を隠してきたこともあり、一つ屋根の下に暮らしていても、夫婦として精神的な一体感を得られない。今や介護者による精神的・肉体的虐待におびえるようになった老夫妻にとって、この家は針の筵である。

He [Godfrey] looked unhappily at Mrs Pettigrew. There was really no consolation left in the house for a man. He was all the more disturbed by Charmian's increasing composure. It was not that he wished his wife any harm, but his spirits always seemed to wither in proportion as hers bloomed. He thought, looking at his wife, It is only for a time, this can't last, she will have a relapse. He felt he was an old man in difficulties.¹⁷⁾

かつて自分の見た目の若さを誇っていたゴドフリーは、ペティグルーが家庭での権力を拡大させていくたび、そしてチャーミアンが健康を取り戻したように見えるたび、自分の居場所を家庭に見いだせず、自分が老け込んでいくように感じる。チャーミアンもまた、自分がちやほやされている時や、元気そうな時に夫が気分を害することを知っている。彼らは長年連れ添ってきたが気を許すことのできない「同志であり敵」(“ally and enemy”¹⁸⁾)なのである。そしてその同盟関係すらも、チャーミアンが私営の老人ホームに入ることによって終わってしまう。小説が再評価され、元気をとりもどしつつあるチャーミアンは夫をペティグルーのもとに残し、新しい自分だけの部屋

で、かつての恋人であったガイ・リートと話に花を咲かせるが、ゴドフリーのことを指摘されると心穏やかでない。

‘And how,’ he said, ‘did you leave Godfrey?’

‘Oh, he was most depressed. These anonymous telephone calls worry him.’ [...]

‘Well, he [the anonymous caller] vexes Godfrey. And then we have an unsuitable housekeeper. She also worries him. Godfrey has a lot of worries. You would see a change in him, Guy. He is failing.’

‘Doesn’t like this revival of your books?’

‘Guy, I don’t like talking against Godfrey, you know. But, between ourselves, he is rather jealous. At his age, one would have thought he had no more room for these feelings, somehow. But there it is. He was so rude, Guy, to a young critic who came to see me.’

‘Fellow has never understand you,’ said Guy. ‘But still I perceive you have a slightest sense of guilt concerning him.’

‘Guilt? Oh no, Guy. As I was saying, I feel unusually innocent in this place.’

‘Sometimes,’ he said, ‘a sense of guilt takes a self-righteous turn. I see no cause for you to feel either in the right or in the wrong where Godfrey’s concerned.’

‘I have regular visits from a priest,’ she said, ‘and if I want moral advice, Guy, I shall consult him.’

‘Oh, quite quite.’¹⁹⁾

半世紀以上も連れ添った夫婦であるのに、夫を家に残してきたチャーミアンは、彼が「ひどく沈んでた」ことについて淡々と話す。ホームに入ったことで罪の意識から解放されたと喜んでいるチャーミアンを、「独善的」と見るガイの指摘は鋭く、チャーミアンも信仰の問題を持ち出さなければ反論できない。気が動転したチャーミアンは何についての話題でもゴドフリーに関連付けて話してしまい、「彼の最大の敵は彼自身なのよ」(“he is his own worst enemy”²⁰⁾) とうわごとのように

口走る。一人で家を去った罪悪感を消す言葉がほしいチャーミアンは、彼が自分に嫉妬していたのだと愚痴をこぼすばかりか、妻である自分が夫の敵であったとは思われたくないために、必死なのだ。

同居していても孤独であった夫婦は離れて暮らしてみても改めて自分たちの関係のいびつさを思い知らされるが、チャーミアンもゴドフリーも、“ally” や “enemy” といった戦争の語彙を用いて自分たちの関係性を表現していることは、前節の *Punch* の記事で、老人たちが戦争の “pressure” のもとに置かれて立ち上がらなくてはならないと書かれていたことを想起させる。家族と暮らしてきてさえない不和のなかにある、精神的安寧を得ることのできない者たちの背後には、戦後のロンドンの情景が広がっていたのである。

作中、チャーミアンは何度も死亡記事や戦争のニュースを知りたがり、それをレティは快く思っていないが、「1945 年に戦争は終わった」(“The wear has been over since nineteen forty-five”²¹⁾) と言っているレティ自身、20 世紀前半の 2 度の戦争体験者であるし、冒頭の手紙を書くシーンでは「この冷戦期」(“in these days of cold war”²²⁾) にこそ小説のテーマを云々、と綴っている。また、ゴドフリーがオリヴ・マナリングに会うため車を止めるのは “bombed building”²³⁾ の横である。戦争は年齢に関係なく、終戦後も人々を苦しめるものであるが、とりわけ高齢者は生きづらさや、不自由さを感じながら生きていたのではないだろうか。かつてチャーミアンのメイドをしていたミス・テイラーは、老後の生を戦争にたとえている。

‘It is like wartime,’ Miss Taylor remarked.

‘What do you say?’

‘Being over seventy is like being engaged in a war. All our friends are going or gone and we survive amongst the dead and the dying as on a battlefield.’

She is wandering in her mind and becoming morbid, thought Dame Lettie.

‘Or suffering from war nerves,’ Miss Taylor said.²⁴⁾

戦後の復興期において、すべての人々の暮らしが厳しいものであったことは間違いない。だが、平和な世の中でも生きるか死ぬかの戦いを生き抜かなくてはならない高齢者たちにはさらに過酷なサバイバルが強いられていた。Mengham が指摘するように、「死を忘れるな」というメッセージが冷戦期における終わらない核戦争の示唆でもあるのだとすれば、怪電話を受ける者たち、すなわち自宅で暮らす高齢者がみな、「戦争で神経をやられて」いても無理はない。²⁵⁾「死を忘れるな」という怪電話は見えざる神の力とするのが伝統的な読み方ではあるが、作中で老齡学者のアレク・ウォーナーは、集団ヒステリーの可能性を示唆している。²⁶⁾ 自宅で暮らしていても、自分が安らげるコミュニティを見つけることができずに、終わらない孤独な戦いの中で、神経をすり減らして生きていた高齢者たちの様子が読み取れる。

そして、自宅で暮らす老人たちよりも厳しい状況に置かれていたのは、公営の老人病棟に暮らしていた者たちである。公営の老人病棟の場合、事態はより深刻であった。長年コルストン家でメイドとして勤め、チャーミアンの最も近い友人であったはずのミス・テイラーは経済的な側面から結局、公営の老人病棟に入居するのだが、そこで暮らす高齢者たちは、自宅で暮らしている老人たちとはまったく別の描かれ方をしている。

There were twelve occupants of the Maud Long Medical Ward (aged people, female). [...]

First came a Mrs Emmeline Roberts, seventy-six, who had been a cashier at the Odeon in the days when it *was* the Odeon. Next came Miss or Mrs Lydia Reewes-Duncan, seventy-eight, whose past career was uncertain, but who was visited fortnightly by a middle-aged niece, very bossy towards the doctors and staff, very uppish. After came Miss Jean Taylor, eighty-two, who had been a companion-maid to the famous authoress Charmian Piper after her marriage into the Colston Brewery family. Next again lay Miss Jessie Barnacle who had no birth certificate but

was put down as eighty-one, and who for forty-eight years had been a news-vendor at Holborn Circus. There was also a Madame Trotsky, a Mrs Fanny Green, a Miss Doreen Valvona, and five others, all of known and various careers, and of ages ranging from seventy to ninety-three. These twelve old women were known variously as Granny Roberts, Granny Duncan, Granny Taylor, Grannies Barnacle, Trotsky, Green, Valvona, and so on. ²⁷⁾

自宅で暮らすことのできる高齢者が行動や対話によって人物描写をされていたのとは異なり、ここで暮らす老女たちは語り手によって一方的に説明されるのみだ。“First,...Next,...”と老女たちの名前と年齢、経歴が箇条書き的に羅列され、この作品で重要な人物であるはずのミス・テイラーですら、12名の「グラニー」の一人として言及される。アッパー・ミドルの高齢者たちが自宅で暮らしているのとは対照的に、上の引用で羅列される老女たちはみなロウワー・ミドルもしくはワーキング・クラスに属する人々である。ミセス・ベティグラーの虐待を恐れたチャーミアンの入居先がサリー州の私立老人ホームであることから考えても、公営の老人病棟に暮らす老人たちは、望んでそこにいるというよりは、入居せざるを得ない経済的事情がある人々だったのであろう。また、50年以上の歳月をともに暮らしたはずの、チャーミアンとミス・テイラーは、1950年代の時空では一度も顔を合わせない。スパークは老人たちが暮らす空間を意図的に分けて描くことで、当時の高齢者たちの暮らしに現実感を与えているといえるだろう。

さらに、『メメント・モリ』においては、遺言状というものが形骸化してしまった事情も細かく描かれている。ヴィクトリア朝の小説においてはしばしば、異なる場所に住んでいても血族をつなぐ役割を果たしていた遺言状は、『メメント・モリ』が描く時空では、親族とのもめごとの種となってしまうばかりか、嘘や隠し事のせいであまり意味をなさなくなってしまうさえする。²⁸⁾ 比較

的裕福なデイル・レティは甥など親族に遺産を継がせるつもりはあるのだが、周囲の人々を信用できずに 20 回以上も遺言状を書きかえているし、老人病棟の老女は嘘か本当かわからない遺言状のことをちらつかせ、どうにか医者や看護師に構ってもらおうとする。

Miss or Mrs Reewes-Duncan threatened for a whole week to report anyone who called her Granny Duncan She threatened to cut them out of her will and to write to her M. P. [...] ‘But,’ she said, ‘you shall never go back into my will.’

‘In the name of God that’s real awful of you,’ said the ward sister as she bustled about. ‘I thought you was going to leave us all a packet.’

‘Not now,’ said Granny Duncan. ‘Not now, I won’t. You don’t catch me for a fool.’

[...] She [Granny Barnacle] would ask the nurse how to spell words like ‘hundred’ and ‘ermine’.

‘Goin’ to leave me a hundred quid, Granny?’ said the nurse. ‘Goin’ to leave me your ermine cape?’

The doctor on his rounds would say, ‘Well, Granny Barnacle, am I to be remembered or not?’

‘You’re down for a thousand, Doc.’

‘My word, I must stick in with you, Granny. I’ll bet you’ve got a long stocking, my girl.’²⁹⁾

彼女たちはせかせかと忙しそうな看護師の足をとめ、回診中の医師に自分を印象付けたいがために、実在するのかかわからない資産のことを口走る。戸籍や名前すら定かでない老人病棟の高齢者には、遺産どころか近親者すら居ない者たちが多かったのだろう。

かりに近親者がいたとしても、20 世紀も半ばになると、わずかな遺産を継ぐために高齢者のご機嫌をとるような若者たちは少なくなっていたようだ。戦後のイギリスにおいて、高齢者たちが室内にとどまらざるを得ない状況にあったのとは対照的に、それまで家庭内労働をしていた若い女性

たちは、職をもち家の外へと働きに出かけるようになった。これも 1950 年の『パンチ』に掲載された“The Young Ladies Are Not at Home”という挿絵付きの詩には、若い女性たちを下宿させている“old Smithey”と呼ばれる老女が一人、ドアから外を眺めている後姿が描かれている。³⁰⁾ 戦後期は男性人口が少なくなるため未婚率も増えるが、同様の原因から女性の社会進出が進んだ時代でもあったのだ。老女に向かって「のらくらしてちゃだめよ、スミジーさん、現ナマつかんだらどう？」(“You can’t be a *drone*,” she says, “Smithey and what about *dough*?”)³¹⁾ と言い放つ若い女性たちは、この老女がホームや老人病棟に入ったとしても、ちょっとした遺産をもらうためだけのために、ご機嫌伺いの見舞いに駆けつけたりはしないのだろう。

自宅で暮らしている老人たちに限らず、やはりここでも問題になっているのは、老人たちの孤独という問題である。『メメント・モリ』で老人病棟に入った高齢者たちは集団生活を余儀なくされ、集合的な存在として描かれていたが、彼らは高齢者たちだけの空間で、社会的に孤立した存在であったのではないか。戦後の復興期、誰もが生きること必死であった時代に、親族や教会すらも高齢者を訪ねるということをしなくなり、国家の支援が必要とされたが、その国家の政策すらも家族の介護に依存していた。生活改善の必要が叫ばれる中でも実践が難しい高齢者ケアには大きな問題があった時代であるということが、スパークの作品からも読み取れるのである。

3. おわりに

以上のように、本論考では、1950 年代のイギリスで高齢者ケアへの注目が高まりつつも、実際の高齢者の暮らしには問題があり、人口の高齢化と合わせて社会問題化していたことを確認し、スパークの作品も、そのような世相を反映した形で高齢者を描いたものとして読み解けることを示した。現に、『メメント・モリ』の作中では、1950 年代が老人へのケア、とくに老人病棟など公的施設の過渡期であるということについて、作中人物

たちが次のように思いを巡らせる。

Two years ago, when she first came to the ward, she had longed for the private nursing home in Surrey about which there had been too much talk. Godfrey had made a fuss about the cost, he had expostulated in her presence, and had quoted a number of their friends of the progressive set on the subject the new free hospitals, how superior they were to the private affairs. Alec Warner had pointed out that these were days of transition, that a person of Jean Taylor's intelligence and habits might perhaps not feel at home among the general aged of a hospital.

この引用からもわかるように、自立した暮らしを続けることが困難になった高齢者たちは、さらに私立の「ホーム」に入るか、公営の「老人病棟」に入るかの選択を余儀なくされたが、当然のことながら費用には大きな開きがあり、ケアの質という面でも差があった。「1950年代さえ終われば」と辛い状況の「今」をなんとか耐え忍んでいれば60年代には楽になれると考えている病院の運営委員もいるが、ミス・テイラーはこれから生まれてくる人々が高齢者になる時代にはもっと状況が悪くなるのではないかと心配している。³²⁾ 過渡期に生きる者たちは、これからの社会がよくなるのか悪くなるのかわからないためにより苦しめられる。そのことに気づかない者たちは、『メメント・モリ』において、自分の孤独を省み、死に思いをはせることができない人物として描かれているのである。

以上、『メメント・モリ』において1950年代のイギリス社会における高齢者問題が読み取れることを示し、スパークがいち早く高齢者に関する問題を小説に描きこんできたことを指摘してきた。ここまでに論じてきたように、スパークの『メメント・モリ』は、まだ他の作家たちが小説において若者たちを描いていた時期に執筆された稀有な作品であり、当時のイギリス国家の方針と、それに対する人々の反応を小説作品の地平に見事に描

き出したスパークの慧眼が光る小説として評価できる。

※本論考は、2017年6月17日に明治学院大学で行われた日本英文学会関東支部第14回大会において行った口頭発表『*Memento Mori* における1950年代と高齢者問題』をもとに、大幅に加筆・修正したものである。

注

- 1) Spark, Muriel. *Memento Mori*. London: Virgo Press. 2010. 以下、このテキストからの引用をする場合は、書名を *M* と省略し、引用後の数字は、この版のページ数を示す。
- 2) David Lodge は Stannard による伝記を冒頭で引用し、名作であることに同意しながらも *Memento Mori* が当時の文壇においては特異な作品であったと述べている。(Lodge, David, "Rereading: *Memento Mori* by Muriel Spark", *The Guardian*. 5 June, 2010. <https://www.theguardian.com/books/2010/jun/05/memento-mori-muriel-spark-novel> Accessed November 1, 2017)
- 3) Spark の作品を彼女の信仰の表現とする研究は Whittaker による研究 (Whittaker, Ruth. *The Faith and Fiction of Muriel Spark*. London: Macmillan, 1982.) にはじまり、枚挙にいとまがない。Spark を "Catholic Novelist" として作中にカトリック改宗者スパークの宗教観を読み解く研究はメインストリームの研究として受け継がれている。昨今の研究については Carruthers を参照。(Carruthers, Gerard. "Muriel Spark as Catholic Novelist". *The Edinburgh Companion to Muriel Spark*. Ed. Michael Gardiner and Willy Maley. Edinburgh University Press, 2010. 74-84)
- 4) McQuillan, Martin. " 'I Don't Know Anything about Freud': Muriel Spark Meets Contemporary Criticism " *Theorizing Muriel Spark: Gender, Race, Deconstruction*. Ed. Martin McQuillan. Hampshire: Palgrave, 2002. 4.
- 5) Ibid, 6.
- 6) 戦後、出生率は一時的に上昇するも、その後ふたたび低下していったため人口減少の不安は続き、1980年代からは本格的な人口高齢化の問題について、世界銀行が悲観的な予測を発表した。(セイン、バット。『老いの歴史』木下康仁訳、東洋書林、2009年。352)
- 7) 一圓光彌「解説：ベヴァリッジ報告の今日的意義」『ベヴァリッジ報告：社会保険および関連サービス』ウィリアム・ベヴァリッジ著。一圓光彌監訳。法律文化社、2014年。273.

- 8) ベヴァリッジ、ウィリアムベヴァリッジ報告：社会保険および関連サービス』一圓光彌監訳、法律文化社、2014 年。140.
- 9) 三富紀敬『イギリスのコミュニティケアと介護者』ミネルヴァ書房、2008 年。8.
- 10) ベヴァリッジ、140 - 1。
- 11) 三富, 10.
- 12) Keown, Eric. “Care of the Old-1” *Punch*, June 21. 1950. 632.
- 13) Ibid, 633.
- 14) Keown, Eric. “Care of the Old-2” *Punch*, June 28. 1950. 688.
- 15) Ibid, 689.
- 16) King, Jeannette. *Discourses of Ageing in Fiction and Feminism: The Invisible Women*. Palgrave MacMillan, 2013. 73.
- 17) *M*, 158.
- 18) *M*, 159.
- 19) *M*, 188 - 9.
- 20) *M*, 192.
- 21) *M*, 5.
- 22) *M* 1.
- 23) *M*, 85, 128. 同じ場所は “the bomb site” としても繰り返して描かれる (*M* 89)。
- 24) *M*, 31 - 2.
- 25) Mengham, Rod. “The Cold War Way of Death: Muriel Spark’s *Memento Mori*”, *British Fiction After Modernism: the Novel at Mid-century*. Ed. Marina Mackay. New York: Palgrave Mcmillan, 2007. Mengham は『メメント・モリ』を冷戦期の小説として取り上げ、私たちが忘れてはいけない「死」とは核戦争であると指摘している。(Mengham 161)
- 26) *M*, 140.
- 27) *M*, 8-9.
- 28) Mengham 164.
- 29) *M*, 9.
- 30) Richardson, Justin. “The Young Ladies are Not at Home”, *Punch*, January 25. 1950. 98 - 99.
- 31) Ibid, 99.
- 32) *M*, 11, 111.

